

あゆみ通信

VOL. 125

あゆみの会(真宗大谷
派大阪教区第2組同朋
の会推進員連絡協議会)
会長 浪花 博
広報 本持 喜康

南無阿弥陀仏の歴史に参加する

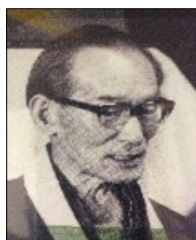


一楽 真先生

ボク(一楽 真師)は20年前に平野恵子さんの本を読みましたが、感動しましたね。このかたは41歳で全身に癌が転移しまして、41歳で3人の子どもを置いて亡くなっていかれました。闘病1年余り。その時に子ども達に何とか自分の出会った世界をノートに書きつづられたのが『子ども達よ、ありがとう』という本でした。元々ノートには「百点満点の子ども達へ」という題が付いていました。まあ、自分から見ると子ども達にはどうしても駄目な子とか劣った子とか言う点数をつけていたけれども、実は一人ひとりが百点満点のいのちを生きていた。それを知らされたので、あなた方に是非とも出会ってほしいということを伝えるのです。いよいよ亡くなっていくということを予感しながら、お母さんは平野恵子と言ういのちを終えていきますと言うのです。この体を脱ぎ捨てて、いろいろなことにガンジガラメになって、癌を抱えているとか、そんな身体から自由になります。いのちを終わって行くと。でも平野恵子と言う



いのちは終わって行くけれども、お母さんはナムアマダブツになりますと書いてあります。だからナムアマダブツを称える時にあなたの側にいつでもいるよと。南無阿弥陀仏と言う世界にあなた方も出会ってほしいと。平野恵子と言うこの宿業の身体、癌を抱えた41年のいのちは終わって行くけれども南無阿弥陀仏は何処にでもある。それにあなた方も出会ってほしいと書かれています。お母さんは南無阿弥陀仏のいのちになりますというのが、安田理深先生の言われた「南無阿弥陀仏の歴史に自分も参加する」ということなのです。だから不死と言っても霊魂が残るのじゃあないのです。そんな怪しい話ではなくて、南無阿弥陀仏がずっと続いていくという意味で、親鸞聖人は「長生不死」とおっしゃるのです。本願文に戻れば、眷属長寿ということですが、これは少しばかりいのちが永らえるという話ではないのです。南無阿弥陀仏の歴史がずっと続いていくということなのです。(後略)



安田理深先生

(一楽 真「大無量寿経講話」2012年奈良・専念寺定例講座から引用)

2組聞法会開始

いよいよ、聞法会が始まります。どうぞ、お越してください。

日時 5月13日(月) 午後2時

会場 紹隆寺(天王寺区堀越町)

内容 お勤め、法話

講題 「共に学ぶ『正信偈』」

講師 新田 修巳先生

(平野区 正業寺)

参加費 500円

2019年各年会費受け付けてます

仏法未熟

1月に娘の一周忌を終えて、嫁の股関節手術後の看取りに付き合っている。術後、右足の麻痺と痛みで、歩行も家中で杖があるので、長時間家を空けるのが怖いので聞法会には残念ながら出られていない。少しずつ、悶々としている時に、左の一楽真先生の法座記録をブログで見つけて読ませていただいた。先生のお話の中に紹介された平野恵子さんの紹介を読んで、つくづく自分は聞法が足りないなあと痛感した。

娘の死への過程に立ち会いながら、ひたすら寄り添い、時には聖人のお話を伝えたりしながら、本当の南無阿弥陀仏の相續が出来ていなかったなあと痛感した。

仏法の教えに学びながら、仏弟子としての心構えが出来ていなかった。逆に、娘の死を通して、南無阿弥陀仏を教えていただいた気がする。聞法第一。少しずつ、回復していく嫁を見ながら、こんなことを考えた。「ポーっと生きてんじゃあねえ」と、チョコちゃんに叱られるなあ。合掌。(本)

称名念仏は、如来わが往生を定めたまいし、御恩報尽の念仏とこころうべきなり 蓮如聖人

あゆみの会例会&第2組門徒 会員研修大会合同研修会報告



2019年3月29日(金) 午後1時30分から阿倍野区の法山寺(藤原憲住職)をお借りして、第2組門徒会員研修大会&あゆみの会第1回例会が開催され、門徒会員、推進員、住職と坊守さん22名と海老海恵幸組長(了安寺)と松本隆信副組長(西教寺)が参加された。



吉田雄彦副会長(法山寺)の進行で、真宗宗歌で開会。挨拶を中嶋ひろみ門徒会長(光照寺)からいただいた。引き続き「『恩』について」というテーマで廣瀬俊先生(第17組法観寺)から御法話をいただいた。

先生は、私たちが日ごろの勤行(おつとめ)後で拝読する蓮如上人の「御文」(聖人一流)の中で上記の言葉を引かれたり、また『恩』と漢訳されたバーリー語の元々の意味は「なされたことを知る」ということで、我が身にいただいたことを心に思うことであると。また、司馬遼太郎氏が、「人」という字に感動されたというお話等いろいろ話された。質疑応答の後、浪花博会長(法山寺)が挨拶を述べ、

「恩徳讃」を唱和し、3時半ごろ閉会した。

(レポート: 佛足寺 細川克彦)

如是我聞

廣瀬先生の法話を聞いて

法山寺 浪花 博

先生は先ずはじめに、最近失われていく言葉に『恩』と言うのがあります。その原因に、戦時中の押し付けに対する反動であったり、戦後の教育で、親や教師の尊厳が失わ



れてきて、卒業式で「仰げば尊しわが師の恩・・・」が歌われず、親や子どもが先生を呼び捨てにする時代になったと言われています。

しかし、釈尊が説かれた多くの経典には『恩』と言う言葉が多くみられます。善導大師の「法事讃」に「『四恩』一父母の恩、二、衆生の恩、三国王の恩、四、三宝の恩」親鸞聖人は「知恩報徳の益」蓮如上人は「御文」の(聖人一流)で、上記の言葉を述べています。

私たちは『恩』をどのように解釈したら良いのでしょうか。

『恩』とは、バーリー語で(カタンニュ)と言い、直訳では「なされたことを知る」で、今までになされたことを心に思うことです。聖人は『恩』

教区同朋大会に

「あなたの居場所は」

5月11日(土) 午前10時

難波別院本堂●参加費1000円

6/26(水) 野外例会決まる

重要伝統的建造物群保存地区の今井町と、大和大谷別院を。(別途、ご案内)



を「恵み」と表現され、沢山の恵みによってと。解釈されています。

『恩』の「因」は「働き」であり、『恩』の「心」は、ありがとうと言う感謝の心です。蓮如上人の言葉を借りれば、「あなたがどんな人に遇っても、どんな人生を送っても、ありがとうと言える人間に成ってくださいと願われているのです。最後に「『恩』は自分に見えないものを見せてくれる大切なもの」と言う言葉で締めくくられました。

私は「『恩』は自分のモノサシでしか物を見ない者には見えないが、如来の本願を信じ念仏をもうす身にさせていただいたことを喜ばば、真実の歩み出来る大切なもの」と、日頃の聞法会の生活から気付(今回も、細川氏、浪花氏のご協力、編集発行が出来、皆様にお届けすることが出来ました。ここに、感謝申し上げます。合掌。(本))